



Kobe University Repository : Kernel

Title	彙報：平成22（2010）年度 海港都市研究センターの活動
Author(s)	添田, 仁
Citation	海港都市研究, 6: 91-93
Issue date	2011-03
Resource Type	Departmental Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	publisher
URL	http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81002774

Create Date: 2013-01-18



彙報

平成 22 (2010) 年度 海港都市研究センターの活動

平成 22 (2010) 年度の神戸大学大学院人文学研究科海港都市研究センター（以下、「海港センター」と省略）は、昨年度から引き続いて文科省・大学院教育改革支援プログラム「古典力と対話力を基礎とした人文学教育」、さらには日本学術振興会「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」と協力して、海港都市に関する研究会を組織・運営するなど、研究面の拡充を図った。

(1) 人文学研究科共通科目の実施状況

①海港都市研究<前期>

この授業は例年、歴史学・社会学の研究者の方々が講師を務めることが多かったが、今年は目先を変え、海港における越境者の現場、および越境文学を中心にテーマに据えてオムニバスを構成した。

前半はNPO法人の理事長等、6人の非常勤講師の方に来ていただき、神戸在住の外国人コミュニティの歴史と現状について、当事者またはそれに近い立場から説明いただいた。後半は人文学研究科の教員（中国文学、英米文学、ドイツ文学、フランス文学、地理学）に来ていただき、世界の越境文学の諸相について、具体的な作品に即して紹介いただいた。

出席者は毎回10名程度であった。

②海港都市研究交流演習(海港都市研究交流企画演習)<後期>

大学院生が専門分野の枠を越えて横断的に議論するなかで、自らの研究を学際的・国際的な視点から見つめ直し、同時に研究の意義を有効にアピールする能力を養うことを目的として開講した。なお、これは12月に中山大学で開催した国際学術シンポジウム(2)―①の準備報告会も兼ねた。

(2) 学際的かつ国際的な研究交流

①第6回 海港都市国際学術研究交流会「東亜海洋文化的発展―跨国網路・社会変遷」

日時：平成 22 年 12 月 9～12 日

会場：中国中山大学

主催：中国中山大学、神戸大学大学院人文学研究科海港都市研究センター

国家という枠組みのなかにおさまることなく、東アジア規模での異文化交流によって生まれた「海港都市文化」について多角的に考察するために、国境を越えた研究者同士の意見交換と、大学院生同士による研究交流を目的とするものである。

今年度は、海港センターと中山大学の共催で、これに韓国海洋大学、中国海洋大学、台湾大学、韓国木浦大学、復旦大学が参加し、社会学、史学、文学、哲学、地理学、文化人類学、経済学等、多分野にわたる研究者が研究報告をおこなった。

会は、中国中山大学アジア・太平洋研究院長・濱下武志氏の開幕の挨拶に始まり、1日目は、教員を中心に、1日目の午後と2日目の午前は、大学院生を中心とした若手研究者の報告をおこなった。時間的な制約や言葉の壁はあったものの、「海港都市文化」やそれをとりまく様々な内容の報告について、多国間の研究者同士の意見交換が行われた。それは、「若手研究者同士の研究報告や交流が意味を持つ」（濱下武志氏）時間でもあった。シンポジウムの参加者は、両日とも50名前後であった。

シンポジウムにあわせて、旧中国陸軍軍官学校の黄埔軍校や、近代中山の外国人居留地であった沙面地域を中心にフィールドワークも行った。

シンポジウムに参加した大学院生の感想の一部を、以下に紹介する（平成 23 年 1 月 13 日に神戸大学で行った、中山大学シンポジウム反省会でのレジュメか

ら抜粋したもの)。

■金潤煥 (博士後期課程・日本史)

「シンポジウムを通じて、史学、社会学、文学、哲学、地理学、文化人類学、経済学等の多学門の研究者の発表から、「海港都市」を学ぶことができた。しかし、シンポジウム発表において、中国側の発表文の殆どが中国語のみであり、言葉の壁を感じた。そして、言葉の壁を感じつつも、発表後、多国間の若手研究者同士の意見交換が少しは出来たと考えられる。この経験を生かし一国史ではなく海港都市間の比較等を行い、近代東アジア海港都市研究という視点を広げていきたい。」

■松村光庸 (博士後期課程・日本史)

「発表者が大変多く、内容も多岐に亘ってましたので、全体の流れを把握することに骨が折れ、やや論文発表大会に終わった感があります。テーマごとの分類、論議の柱立てがもう少し明確であればよかったのではないかと感じました。個々には大変興味深い論文も多々有り、論議の時間が十分あればと悔やまれるところです。ただ、大きな輪郭としては、東アジアの海港都市を大きく括って捉えることで明らかとなる研究課題が浮かび揚がってましたし、風雲急を告げる今日的な情勢の中であって、更に、もっともっと深く掘り下げるべき課題の存在が明確になっただけでも大変有意義であったと思います。」

■李明哲 (博士前期課程・哲学)

「今回の海外発表の経験を通して、最も有意義だったと思うことは、多くの先生方や院生方との交流です。研究対象の全く異なる先生方からのご意見は、私の視野を広げてくれましたし、今後もコンタクトを取ることが出来る関係を築けたことをとても嬉しく思います。」

■吉原大志 (博士後期課程・日本史)

「実際の研究報告を通じて改めて考えたのは、使用言語・プレゼン方法である。自分が専攻する日本史では、使

用言語は日本語が自明であるし、配布資料も多い。しかし今回は報告時間の短さと、多様な専攻の方々が集まる場でもあることから、予備原稿以外の資料はパワーポイントによる写真の説明にとどめた。しかしパワーポイントを日本語のみで表示してしまったために、どこまで内容が伝わったかは心もとない。予稿集に中国語・韓国語(要旨)が載っているとは言え、パワーポイントの使用言語は、量も多くないので、3ヶ国語使用してもよかったように思う。」

■平井太規 (博士後期課程・社会学)

「自分自身決して英語は得意ではないが、中山大学の英語が得意な学生とコミュニケーションをすることで国際交流を十分にできたとし、台湾大学の学生とも次回のシンポジウム(台湾大学)での再会を約束するといったように、国境を越えたネットワークを少しは構築することができた。」

なお、本シンポジウムにおける本学教員の天津留厚の研究報告、ならびに本学大学院生の研究報告は、紀要『海港都市研究』(6号)に掲載した。

②海港都市 colloquium (コロキウム)

国内外の研究者が、より広い視野で海港都市・異文化接触について考え、相互に意見を交換する場として、神戸大学において「海港都市 colloquium」を1回開催した。

第14回 講演会「古代ローマの海港都市オスティア—発掘と遺跡保存の現状と課題—」

日時：平成22年11月18日(木) 15:30～18:30

会場：神戸大学文学部B棟小ホール

主催：神戸大学大学院人文学研究科海港都市研究センター

共催：科学研究費補助金基盤研究(S)「大規模自然災害時の資料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」(研究代表者：神戸大学大学院人文学研究科 奥村弘)、

科学研究費補助金基盤研究 (B)「古代イタリア半島港湾都市の地政学的研究」(研究代表者:上智大学文学部 豊田浩志)

プログラム:

アンジェロ・ペレグリーノ (イタリア・オスティア・アンティカ遺跡監督事務所所長)

「オスティア:大規模な考古学地区の管理」

マルコ・サンジョルジョ (イタリア・オスティア・アンティカ遺跡監督事務所技術部長)

「オスティア:川と海の中の港町」

ミケーレ・ラッディ (イタリア・ローマ考古学特別監督局嘱託考古学調査員)

「オスティアの道路網と領域:最近の考古学的調査と地誌学的枠組み」

概要:

オスティアは都市ローマの外港として栄えた町であるが、古代末期に凋落して住民が激減するとともにテーヴェレ川の土砂に埋もれていった。これが発掘によって再びその姿を現すのは20世紀になってからのことである。埋没した古代都市としては、我が国ではポンペイが有名だが、オスティアもポンペイとは違った意味で非常に重要な遺跡である。そこで今回の東京・京都・福岡での連続シンポジウムを機会に、海港都市研究センターの主催で講演会を企画した。

講演はイタリア語で行われたが、講演原稿を翻訳した資料を当日配布し、パラグラフ毎に毛利晶教授が説明を加えながら訳を読み上げる形で進められた。講演では視覚資料を多く用いながらオスティア発掘の歴史的経緯や現在生じているさまざまな問題点が提示された。出席者は約15名で、日本における発掘との比較に関して議論されるなど、講演後の質疑応答も活発であった。

③第6回 資料収集・研究交流会

平成23年2月28日～3月5日、神戸大学において、海港都市研究に関心を持つ若手研究者を対象として、日本において海港都市関連資料を収集するための補助

を行う「資料収集・研究交流会」を開催した。海外拠点大学から若手研究者5名を招聘し、彼らが行う海港都市に関する資料の調査・収集を援助した。

招聘した若手研究者は、顔浩 (中国中山大学)、秦佳荔 (中国海洋大学)、具知瑛 (韓国海洋大学)、キム・ギョソワン (木浦大学)、蔡旻珊 (台湾大学)。

(3) 研究成果の発信

①紀要『海港都市研究』の発行

平成23年3月、海港センター紀要『海港都市研究』(6号)を発行した。第6回海港都市国際学術研究交流会「東亜海洋文化的発展—跨国網路・社会変遷」での大津留厚の研究論文、加えて本学大学院生の研究論文を収録した。

②海港都市関係資料の調査

昨年度から引き続いて、附属図書館との共同作業を進めた。今年度からは、神戸市立中央図書館、神戸市文書館とも協力して、「神戸又新日報」(マイクロフィルム)のデジタルデータ化に着手した。

(文責:添田仁)